



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	芸術作品における道徳と美の関連性についての研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	栗, 楨
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14562号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81232
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Zhen_Li_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：栗 楨

学位論文題名

芸術作品における道徳と美の関連性についての研究

・本論文の観点と方法

本論文では B.Gaut の *Art, Emotion and Ethics* など近年の「分析美学」に関する著作を手がかりとして、芸術作品における道徳的価値と美的・芸術的価値との間に内在的な関連性はあるのか、あるとしたらそれはどのような関連性なのかという問題に答えることが試みられている。また本論文では、個人の優れた特質のすべてを表現する、広い意味での「倫理的」という概念ではなく、狭い意味での「道徳的」という概念が採用されている。さらに美的概念についても、形式美および感覚的特質のみを含むような狭い美的概念ではなく、芸術的価値と同一視できるような、広い意味での美的概念が採用されている。

本論文では、作品の道徳的価値と作品の美的・芸術的価値は無関係であると主張する「自律主義 (autonomism)」、作品の道徳的長所が作品の美的・芸術的長所になり、作品の道徳的短所は作品の美的・芸術的短所になると主張する「道徳主義 (moralism)」、さらに作品の道徳的な短所が作品の美的・芸術的長所になり、作品の道徳的長所が作品の美的・芸術的短所になると主張する「不道徳主義 (immoralism)」、という三つの立場について詳しく検討されている。本論文はこれらの立場に詳細な検討を加え、さらにトランスグレッシブ・アートの分析を通じて、「反抗的な不道徳主義」と「芸術的表現手段としての不道徳」という立場を提起し、それによって作品の道徳的価値と芸術的価値との間には関連がありうるという結論を導き出す。

・本論文の内容

まず第一章での本論文で用いられる概念についての説明の後、第二章では「自律主義」がとりあげられている。そして栗氏は自律主義に反論するために、作品における認識的価値について検討している。芸術作品は、様々な推理や経験を提供し、さらに何らかの証言を行ったり人々の想像力に訴えかけたりすることによって、トリビアルではない知識を伝達できる。このような事実から、芸術作品には認識的価値が存在すると栗氏は主張する。さらに、栗氏は芸術作品の認識的価値と美との関連性を、直観を参照した実例の提示、評価言語の使用、N.Carrol が提出した論法の適用、といった点から明らかにして、芸術作品における認識的価値は作品の美的価値に影響すると述べる。こうして、芸術作品の美的価値は認識的価値や道徳的価値とは無関係だとする美的自律主義は誤りだとする主張が導かれる。

一方、芸術作品を道徳的に評価することはできないとする「ラジカルな自律主義」は、道徳的内容がもつ重要性を無視しているとして、しばしば批判の対象となる。一部の芸術作品にとっては、道徳的な側面は偶然的な部分ではなく構成的な部分なので、これらの作品を道徳的に評価することが可能である。さらに芸術評論では芸術作品に対する道徳的評価がなされるので、芸術作品に対する道徳的評価を否定するラジカルな自律主義は、芸術評論の実践を大きく誤らせる可能性がある。

また穏健な自律主義は作品の中に道徳的価値が存在することは認めるものの、その道徳的価値と芸術的価値との関連性は否定する。しかし、道徳主義か不道徳主義が成功するなら、それは穏健な自律主義に対する最も強力な反論となる。

次に栗氏は第三章で、芸術哲学における道徳主義の二つの立場（「穏健な道徳主義」と「倫理主義」）を検討している。まず、「穏健な道徳主義」は作品の道徳的短所（或いは長所）がときに作品の美的・芸術的短所（或いは長所）になると主張する。そのような理論は一部の論者からみれば不完全なものである。しかし、美的・芸術的関連性をもつ道徳的短所（或いは長所）が常に作品の美的・芸術的短所（或いは長所）になると主張する「倫理主義」には、作品が表す道徳的に善い態度が作品の

認識的価値を損なうことがあるという問題点がある。また道徳的善さと美しさとの間、また道徳的悪さと醜さとの間に繋がりがあるということはできるが、「道徳」の独裁と圧迫、さらに「不道徳」の反抗と自由という性格を考慮するなら、必ずしもそうとは言えない。このように芸術哲学における道徳主義の二つの立場を比較することによって、栗氏は「穏健な道徳主義」のほうが正しいと結論する。そして栗氏は、その根本的な理由は、「多様性と自由な精神にあふれた芸術の本性」にあるとする。

さらに栗氏は第四章で、芸術哲学における不道徳主義の検討に入る前に、徳倫理学者である M.Slote による「立派な不道徳」論証を検証している。Slote は「立派な不道徳」について「不道徳的行為自体がときに立派なことである」とする強い主張、弱い主張、さらに中程度の主張があるとする。栗氏はここで、弱い主張および中程度の主張は成立せず、不道徳主義を支持するために依拠することができるのはニーチェ主義的な強い主張であるとする。

また不道徳主義における二つの論証である認識的不道徳主義と内在的目的論証にはそれぞれ批判がある。前者の最も重大な問題点は、作品の認識的価値は作品の不道徳的態度から由来することを証明できない、ということである。そして内在的目的論証に関して言えば、作品が道徳的短所もっていたとしても、ほかの要素によって成功することも可能であるという点で、この論証も失敗している。

さらに、栗氏は芸術哲学における不道徳主義を支持する三つの論証を退ける。まず、A.Eaton の「強い不道徳主義」の論証では、実際に作品を魅力的なものだと思う理由がキャラクターの良い特質ではなく、道徳的短所にあるということを証明できない。続いて T.Nannicelli の発生論的アプローチは作品自体ではなく作者の不道徳性に着目するので、この論証もかなり弱い。S.Woodcock の喜劇不道徳主義にもとづくアプローチは、悪意のあるユーモアの道徳的短所が作品自体の面白さに貢献することをうまく説明できない。

最後に栗氏は第五章で「反抗的な不道徳主義」と「芸術的手段としての不道徳」を提起している。道徳義務の重要な特性には、R.M.Hare が定義した「優先性」や、B.Williams が指摘した「最高の規範性」がある。そして、不道徳とは道徳義務に違反することなので、最高の規範性を有する道徳義務に違反するためには、不道徳な行為を行う理由は道徳と同等かそれ以上の力をもたなければならない。そして芸術的な表現手段としての不道徳は、何らかの理由や考えがもつ力と重要性を表現するためにもっとも効果的だと考えられる。ここで栗氏がとりあげるのはトランスグレッシブ・アートである。この種の芸術の中では道徳に違反すること（すなわち、不道徳であること）が作品の美的・芸術的価値に貢献している。「反抗的な不道徳主義」は道徳権威に対する反抗の認識を表現している不道徳的な作品、さらに意図的に不道徳の特質を利用している作品の中に見られる。栗氏はこの論法によって、道徳的価値と美的価値との関連性が直接的に論証されるとする。

さらに栗氏は本論文での検討の結果、芸術作品における道徳と美との内在的関連という問題については、文脈主義が最も正しいと結論する。つまり芸術作品に対する道徳的評論という我々の実践には、穏健な道徳主義と不道徳主義が共存していると結論する。